

亡き両親のため 幸せになる

被災学生 N.Y.で決意

同時テロ遺族と交流

小川さん(大槌)ら9人

【ニューヨーク共同】東日本大震災で被災した本県の3人を含む東北3県の9人の学生が13日、2001年の米中枢同時テロで崩壊した世界貿易センタービル(WTC)の遺地(グラウンド・ゼロ)を訪れた。現地ではテロの遺族でつくる「9・11家族会」のリー・イエルピ会長(68)らと交流。消防士の息子が殉職した同会長から、全てを失っても笑顔で生きていこう」と励ましを受け、学生たちは自らの夢に向かって再起を誓った。

本県から参加したのは、津波で両親、祖父母、姉を亡くし今年6月からミネソタ州の高校に通う小川彩加さん(18)＝大槌高卒＝と、宇都宮大1年の千葉真英さん(18)＝大船渡高卒、東北大1年の上沢知洋さん(18)＝盛岡

一高卒＝の3人。このほか宮城、福島出身の大学1年生6人が参加した。教育支援グローバル基金(東京)の支援事業「ビヨンドトゥモロー」と日米両政府の「TOMODACHIイニシアチブ」の協力で、今月7日からハリケーンの被害を受けた南部ニューヨーク州リンズなどを訪れている。

一行はテロの犠牲者全員の名前が周囲の石に彫られている跡地の人工池を見学後、犠牲者の遺族や跡地記念館のボランティアら十数人に被災地のビデオを見せた。

小川さんは震災直後、「なぜ自分だけ助かったのか」と自問自答する日々だったが、ルース駐日米大使との交流を機に支援を受けて海外留学を決意した。ファッションデザイナーになる夢を抱く小川さんは「亡くなった両親のためにできるのは、自分が幸せになることだと思つ」と英語で心境を話した。

福島県二本松市出身で宇都宮大国際学部1年の菅野翼さん(18)は「息子さんを亡くしたイエルピさんが、笑顔をつくって話すのが印象的だった」と感想を語った。



世界貿易センタービル跡地で、石に彫られた日本人犠牲者の名前をたどる小川彩加さん(左)と「9・11家族会」のリー・イエルピ会長(13日、ニューヨーク(共同))